

風 狂

第44号

風 狂 の 会

風狂第44号目次

詩

| | |
|-----------|----------|
| 私の還暦の日 | 高 裕香 |
| 愛国心 | 高村 昌憲 |
| ほんのいたずら心 | 出雲 筑三 |
| 上 井 | 北岡 善寿 |
| 聖 夜 | 原 詩夏至 |
| 孤独もまた楽しいぜ | 堀口 精一郎 |
| まっとうな道 | なべくら ますみ |
| 夜盲症 | 長尾 雅樹 |

風狂ギャラリー

| | |
|--------------|-------|
| 三浦逸雄の世界（二十八） | 三浦 逸雄 |
|--------------|-------|

エッセイ

| | |
|-----------|-------|
| 狂気について考える | 神宮 清志 |
|-----------|-------|

翻 訳

| | |
|----------------|---------|
| アラン『大戦の思い出』（十） | 高村 昌憲 訳 |
|----------------|---------|

執筆者のプロフィール

還暦の日は、赤いちゃんちゃんこではなく
頭の中の熱いマグマが噴火したように
怒り大爆発で 第3の人生が始まった

著作権の意味も知らない教師がいて
外部賞入賞 6年生の優秀作品を
学校誌から外してしまったのだった

自分の作品をどんなに誇らしくしていたか？
きっとその子は、一生、その学校誌を傍に置き
小学校の思い出を大切にし、励ましていくだろうか？

教師生活 30年が過ぎ
数え切れないほどの子供達との出会いがあった
少しは、私との時間を思い出してくれるだろうね

まだまだ、怒れる。
子供の心を大事にしろ。
まだまだ、私は、やっていける。

冬季オリンピックを観ている時には
やはり日本の勝利が気になって来る
敗戦が濃厚な現実を感じると興味は
急に萎んであの陰鬱な青春が現れる

自らが勝負できる肉体ではないけど
傍観者にも闘争心だけは両眼に宿る
勝敗に拘って見ると夢中になるけど
殆どが怠惰で無為な感情に埋没する

あの興奮は一体何者なのだろうか
我を忘れて観たことをふっと考える
あれは全ての物を落下させる重力と
同じような必然の感情に思えて来る

自分の国の選手を応援する感情でも
親が子供を思う感情と同じだろうか
地上へ落下する同じ方向へ働く力も
愛国心に興奮するのと同じだろうか

地上へ落下しない別方向の力もある
国を別方向へ導く愛国心があるのだ
親と子供が容認し合う愛国心もある
戦力に恃まない鋭敏で高邁な精神だ！

延命処置はしない事になった
流動食も通らない危篤のなか
女は点滴の水だけで三カ月余り生きた

ほんのいたずら心の演技だった
忍従してきた苦渋の歲月
暴君へのお仕置きのつもりだった

健康な者でも不健康になる治療
ど忘れも三度続くと本物になる
加齢も重なり事態は思わぬ方へ

一途に心配している夫
初めて味わう優しい気遣い
いまさら嘘だったのよとは云いづらい

何を言っても本気にされない患者
体力気力の衰えもおどろくばかり
院内環境に負けて加速する症状

愚かだった
しかしこのまま挫折してなるものか
まだら雲のなか一筋の光を探す

医師の予想を大幅にこえた孤高の十四年
八六歳にしては澁刺とした肌のいろ
時たま執着する視線は不屈の残影

ありがとう そしてごめんね
全身で集めた無言の水分に託す
なつかしき一滴の涙

駅を出て

懐かしさからではなく

田舎じみていないのが興醒めで

南に拡がる町並を見ていた

そこは倉吉と言っているが

遠い東国にいるぼくには

今でも昔の^{あげい}上井だ

思い出があるというのでもない

倉吉は上井から出る

軽便鉄道の終点の町だった

鉄道はとうの昔に消えた

それでももっと遠い昔から

そこは上井であって倉吉ではない

駅の北側の小高い森には

上井毘沙門天が今もある

平安時代に〈平安〉なんかない！
そう叫んで源氏すら読もうとしない男
それを言うならこの現代にも
確かな〈現実〉などありはしないのに

ちなみに

清姫が蛇と化すに当たっては

- 1 安珍の女犯の因果応報説
 - 2 清姫の邪悪な横恋慕説
 - 3 西洋の〈原罪神話〉の換骨奪胎説
 - 4 既存の〈意味〉を超越した〈ポエジー〉説 等々
- 無数のディスクールが巷に流れている

甚五郎兵衛！

甚五郎兵衛！

と名を呼ぶので思わず振り向いたら
俺ではなく「ジングルベル」だった
とはいえ
売れ残りのケーキは未だに山積し
雪は太郎の屋根にも次郎の屋根にも
甚五郎兵衛（即ち俺）の
ニセモノのサンタの赤帽にも降り積もり――

あまつさえ

その行き場のない在庫を捧げるべき
高潔なる笠地蔵も
純潔なるマッチ売りの少女も不在の
このけたたましく陽気な
聖なる夜

もちろん

別に怒っているわけではないのだ
ただ敢えて一つ言わせて貰うなら
この期に及んで何故また雪なのだ
「ねえちょっと、それ頂戴」

不意にそう呼びかけられ目を上げると
うら若い臨月のおかみさんが
「ありがとうございます！ ええと——」
「ほら、それ」
おかみさん艶然と笑って
「その大きなチョコレートの——真っ黒な」

新婚早々越路吹雪の舞台をみた
たしか新橋演舞場だった
妻は産月うみづきで大きな腹をかかえ
ちょっと冒険かな
いや素敵舞台だから是非みたい

夫婦で舞台に感動し 妻の目にうっすらと涙
タクシーを拾って
大森の日赤病院にかけこんだ
翌日元気な男の子が生まれた

大森は面白い街だった
俺は線路際のハーモニカ酒場で飲んだくれ
妻は子育てに忙しく
日曜日は三人で銀ブラ デパート歩き

五十代に飛ぶ
商社の友人からの招待状で
ふたたび越路の歌と踊りをみた

——あなたの燃える手で わたし私 を抱きしめて

桜花爛漫と咲き そして散る美しき世界
見事な日生劇場の舞台だった

夫婦生活は六十年余 二人の思い出は多い
旅行・卓球・ゴルフ・ボーリング・ハーモニカ
別々の趣味の世界もある
妻は書道 俺は文芸
多分二人とも充足した人生であったと思う

今 妻は病気で入院し 俺はひとり暮らし
面会のたびに俺の話を黙って聞き
うなづくのみ

別れ際のじっとみつめる淋しそうな目
じゃあ 又くるね 俺は
〈孤独もまた楽しいぜ〉
思わず出そうなこの言葉をやっとな飲み込んだ

(二〇一八年三月五日記す)

川沿いの遊歩道

大真面目に

息を吐き 吸って 切らせて歩く人たち

倒れないで下さいよ！

私もちょっと真似をして

腕を振り 急ぎ歩く

そんな私を目がけるようにして

歩いて来るかなり年配の男性

正面から

ここは左側通行なんだ！

目を剥いて おっかない顔が私を睨む

言葉の出ない私を睨み続ける

その連れと思われる女性が 後から彼の腕を取り

私に向け 黙って頭を下げる

すみません！ というように

男は

ここは左側通行なんだ と繰り返す

白く大きな文字でしっかりと

自転車専用道路

歩行者優先道路 と書かれ

堤防は市民の健康志向に一役買うようになった

しかし 歩行者は左を歩け とは

どこにも表示されていないのに

出だしの良かった一日が

へし折られた気分になったが

諍いを持ちたくなかった私はにっこり笑い

心にもない事を言ってしまった

すみませ〜ん

彼に付き添っていた女性がまた頭を下げた
すみません！ というように

車は左 人は右
これは交通ルールの第一歩です
私はまっとうな道を歩いています
車の通らない赤信号を 駆け抜けてしまうことは
しばしばありますけど

足のない女が
髪を足の当りまで長く伸ばして
ポーッと立っている
鶏の死骸を両手で左脇に抱え込んで
眠り足りない怨念の復讐を果たしたか

私は誰
ここは何処

目は虚ろに泳いで
あらぬ方向を凝視する
口はかすかに薄笑いを噛み殺している

全ての神経を魔性に操られながら
幽明の境を迷う荒廃の感情は
明日のことは知ってはいない
足は煙のように消え果てて
腰から上が着物に包まれて
裾は境目がなく朧である

見るものも見えず彷徨する鳥目の女
鶏の肉はひきむしられて
女の手の中で死を購っているのだろう

暗闇の中で精神を錯乱させて
何が楽しいのだろうと不思議の挙措をする

見えぬ世界の絵図を求めて
空を掴みながら
足はない

浮遊する鬼女の面影は薔薇の腐臭
迷路に浮かんでいる掃きだめの鶴
見えない目で覗いている針の筵

生きるということは地獄を引き摺ること
鶴が病を救うか
長い髪が霞んだ裾先で消え失せる

(松井冬子の画より)



三浦逸雄 「イチョウの木のある風景」6号（麻布・油彩）

能面の目を四角く開けるのは、誰がいつごろ思いついたのか。まことにすごい知恵だと思う。女面でも男面でもその多くが四角く開けられていて、おだやかな視線となっている。それでは目を丸く開けるとどうなるか、非日常的な緊張した表情になるのである。丸く開かれた目、それは精神的に異常に緊張した状態を表す。非日常的な精神状態、それは狂気に近づく。そうした丸く開けられた目を持つ面も数多く作られている。

狂気というもの、それは現代では不吉なもの、忌避すべきものと多くの人が思っている。狂気を精神病として遠ざける。人が気が狂うという現象を「病気」としたのは、一九世紀のフランス医学に始まると聞いた。それ以後多くが「患者」となって、鉄格子の嵌った病院へ閉じ込められてしまった。しかしそれ以前では人々は日常的に気が狂うという状態に接していた。身近の人が気がふれたとき、人々はその人に神が宿ったと思うこともあった。畏れた、つまり畏怖の念をもったのである。歴史的にみて、気が狂った人は多くの社会的貢献をしている。ジャンヌ・ダルクは気が狂っていたと見るのは今風の見方であって、当時は神が宿った神の子として見たのである。天草四郎もそうした人だという説がある。

誰でもよくご存知の「般若」...これは嫉妬に狂った女である。嫉妬して狂うというと、今の人は恥ずかしげに薄笑いを浮かべる。しかしどうして恥ずかしいのだろう。嫉妬するというのは、ごく自然な感情であって何も隠すことはない。堂々と嫉妬してよいと思う。狂うほど嫉妬することとはなんと崇高なことだろうとさえ思う。そんなことを能面を作りながら考え、そして教えられることもあるのだ。

信じていた人に裏切られる、愛していた深さが並々ならぬものだっただけに常軌を逸してしまふ。常軌を逸してしまふほど愛しきっていた、こんな崇高なことではない。般若の面には深い悲しみが満ちている。同時に抑えきれない憤怒がある。そしてこのひん曲がった顔になる前はさぞかし美しい女だったであろうという面影を蔵している。品格も失っていない。純度の深さ、これがこれだけの形相を作り出しているのだと思う。日本人が作り出した造形としてこれほど優れたものも少ない。狂うということは、かくして崇高な恐れ多いことなのだ。能は人間の葛藤を描く劇である以上、狂った人が多く登場してくるのは自然のことであろう。少なくとも中世人においては、劇的なこととして後世に残すに値することだったのだ。

「メリルリンチ証券」というアメリカ最大の証券会社が日本に上陸して話題をさらったのはいつごろだったか。今は撤退しているのか、ほとんど活躍が見えてこない。この証券会社の創始者はチャールズ・メリル。彼は若かりし頃ウォール街の証券会社での余りの刺激の強さに、ノイローゼにかかり、約十年間田舎で釣りなどして過ごした。再びウォール街に舞い戻ると、友人のリンチとともにまったく新しい方式の証券販売を始め、これが一般投資家の圧倒的な支持を得て今日にいたっている。

今や私たちの生活に欠かすことの出来ないナイロン、その発明者の名はウォレス・カロザース。といってもすでにこの名を知っている者は少ない。そのくらいナイロンがポピュラーなものとなったということなのであろう。この人類の恩人ともいべきカロザースは、三九歳の若さで自殺している。若い頃から神経障害に悩み、周辺の冷たい視線に傷つき、組織の中で孤立しが

ちだったといわれている。

これはほんの一例にすぎないが、私たち人類をリードしてきた人たちの多くに「障害者」ないしは「異常者」というレッテルが貼られている。このことについては見直してみる必要があるのではないかと思う。まずこのメルルにしろカロザースにしろ本当に障害者であり、異常者だったのだろうか。時代を先取りした天才たちこそ正常そのものであり、彼らをかかえた組織のほうが異常であり、障害ある器だったのではないか。

いずれ組織というものは未熟きわまりないものである。ときとして狂気の様相を帯びることさえ幾たびも繰り返されてきた。メルルがウォール街を去ったのは一九二九年のことで、例の大恐慌の年である。彼は大恐慌前夜に持ち株のすべてを売り抜けていた。彼は恐慌を理論的に見通していたのか、それを肌で感じていたのか、今となっては確かめようもないが、たぶんその両方ではないかと思う。大恐慌直前に持ち株のすべてを売り抜けた人に、チャーリー・チャップリンが居る。さすが「モダン・タイムス」の作者は先見の明十分だったのであろうか。いずれにしろその点でも天才だったのだ。この行動だけ見ても彼らは正常そのもの、ウォール街を徘徊していた組織という化け物こそ狂っていたのではないか。

チャールズ・メルルが十年後にウォール街に復活したときは、一般投資家の投資意欲が育っていたときで、その期待に応えるべく新方式を打ち出したのであった。タイミングも着想も絶妙だったといえる。持ち株を売り抜けた資金をもって、悠々と田舎で過ごしていた十年間はまさに充電期で、独自の想を練りその機会をねらっていたに違いない。彼の行動だけ見ていると、異常どころか正常そのもの、しかも常に時代をリードした天性には感服するほかない。しかしいっぽう彼が精神科医にかかっていたことも紛れもない事実である。彼の驚くべき直感力と優れた着想とは、傷つきやすい繊細な神経によって成り立っていたのであろう。

「墨田川」という能楽がある。わが子を人攫いにさらわれて、訪ね歩く母親の物語である。この母親役の能楽師が掛ける面は「深井」という面である。頬のこけた中年女のやや寂しげな表情をもち、特徴的なのは目を丸く開けている点だ。思いつめた心をこの丸い目が遺憾なく伝えていて哀れである。丸く開けられた目が一点を見詰めている。緊張感があり、また非日常的な心の葛藤がよく現れている。

わが子を思う母親の心、これほど純粋な愛もないだろう。狂うほどに愛しきるということは崇高なことに違いない。そして思うのだ。ここまで愛しきることが出来るということは、幸せなことなのではないだろうか、と。般若の面もそうだが、中世の女性の心の深さ、純度の高さ、これは凡百の者にもつことの許されぬ気高い境地ではないか。いい加減に過ごしている者には理解できない境地に違いない。ここまで純粋に生きるということの価値を知っていた中世の女性は、考えようによっては幸せだったのではないかと思うがいかがなものであろうか。

多くの人は自分は狂気とは遠いところに居ると信じている。正気であると信じて疑わない。日常的には自分が、正気か狂気かなど意識さえしていない。たぶんそれでいいのだろう。しかし誰でも狂気は正気の中に潜んでいる。このことに気付かないだけである。そもそも正気と狂気との間には深い溝があり、狂気など自分は関係ないと思い込んでいるようだ。しかし果たしてそうだろうか。

「人間商売さらりとやめて 天然の向こうへ行ってしまった」と高村光太郎は妻・智恵子を描写している。高村光太郎は智恵子という狂気の中の人を妻として居ただけに、よく観察して詩人らしい捉え方をしている。詩の中であるが、智恵子を「審判官」と呼んでいる。自分が裁かれていると感じていたようだ。幼児と同じになってしまった智恵子は、もはや駆け引きもなければ、ウソも知らない。それにひきかえなんと正気の自分は小さなことに捉われているのだらうと、日常的に感じていたに違いない。嘘も多いし、世俗的な自分を断じたい気持ちをもっていたことが想像できる。

部分的に、または時間的に天然の向こうへ行く人は案外われわれの周りに存在する。つまりあるときは瞬間的にであっても、人間商売さらりと忘れている人。あるいは心のうちに、天然自然をもっていてそれが大きくなったり小さくなったりしている人。こういう人は意外と多いのではないか。

今ではこうした狂える人を精神病患者として、鉄格子の嵌った施設に隔離してしまう。これでは何も社会的に貢献しようがない。そればかりか健康な人でも、そんな扱いを受けたらおかしくなってしまうだろう。かくしていかに多くの優れた才能が精神病棟で埋もれていったことだろう。バレーの天才・ニジンスキーは三〇歳のときに精神病院に入れられ、以後三〇年間一度も娑婆に戻ることなく、精神病院に生涯を送った。「狂気の中に生きてついに正気に戻ることはなかった」と百科事典に出ているが、これを見たたん「それは違うだろう」と思った。ニジンスキーは狂人として扱われただけで、正気の人として扱えばいくらでも社会復帰は出来たはずだと確信をもって思った。

友人がその療養先に訪れたとき、高くジャンプして見せたと報告している。そのときの写真が残っていて、それを見るとニジンスキーは背広を着て、きちんと髪はとかされて居り、どこもおかしいところはない。そのジャンプは並外れた高さになっていて、バレーダンサーとして一時代を画した人に相応しいものを十分に伝えている。惜しいことだなどと思う。彼を普通の人として扱えば十分にバレーの舞台に立つことも出来たはずである。味のあるバレーを見せてくれたと思う。ほんとうに惜しいと思う。

一九七八年イタリアでは通称「バザリア法」が施行され、精神病院を全廃することになった。精神病患者を社会全体で受け入れようということである。身体障害者・精神障害者を健常者と同等として迎え入れるべきだという考え方による。映画「人生、ここにあり！」は、精神病患者が協同組合を組織して、床の寄木細工を仕事として成功させてゆく物語で、実話に基づいており、多くの人々の共感を得た。ひとつの協同組合の成功に刺激されて、イタリア全土に広まり、その後大量の協同組合が組織されている。日本でも上映され、映画が終わると観客から一斉に拍手が送られた。イタリアは人権先進国である。もって模範とすべきであろう。（了）

第八章

翌年の夏になり、私にとってはもう一つの戦争の期間が始まりました。下士官のデュジャルダンはフォンテーヌブローへ去りました。ゴンティエは住居内の元帥になり、私の上官になりました。私はその頃には上等兵でした。高い階級が私に与えられました。私は本能の働きによって拒んでいました。そちらに引き寄せられる儘になりたくありませんでした。私は自由の儘でした。従って、命じる代わりに意見を求められることが一度ならずありました。命令には常に敬意を払うものであると認めた機会もあります。でも、私が権力を握ったなら、別な命令をしたらだろうと私は言うに違いありません。この時期の私たちは、大変に怖かったB大尉から解放されていました。彼の代わりの者は、ロリアン校の老先生だった人で私を覚えていました。彼は親切でした。しかし私が彼に従った機会は稀でしたし、彼は厳格であり乱暴でさえありました。そして私は彼に同意しました。彼はブルトン人でした。何時もコニャックとか桜桃酒を持っていたのは本当ですが、勤務は正確でしたし、怖くもありませんでした。ところが彼は参戦し殺されました。この種の上官たちと共に私には選択の余地がありませんでした。私はそうでなければならなかったのです。

この幸せな夏に、ゴンティエは自分の権力を兄弟の様に使いながら、将校たちには可能な限り私から別々にしました。私たちは電話番号を一兵卒に委ねて、電話網の技術者になりました。有益な仕事ですが、そこまでは余り顧みられない仕事でした。朝方の三時に、私たちは屢々加工された鱈やグリュイエール・チーズを持って、霧の中や薔薇色の曙の中の道を辿りました。夕方までに私たちは親方になっていました。電話線の後を追っかけること、結合部分を検査すること、摩擦で露出した部分にタールを塗った麻布で覆うことをしていました。森の中で、道の上方に電話線を上げるために一本とか二本の棒を切ることもあります。それと同時に砲弾の穴を観察すること、平坦な地域に電話線を通すこと、長い回り道と引き替えに、通すのが危険でも時々を取り替えるための電話線を張ること、以上が私たちの仕事でした。参戦した人なら全ての人々が良く知っていましたが、朝の一時停戦を私たちは利用しました。この散策中に私たちは砲台を発見しました。〈秘密〉と名付けられた砲台でしたが、それは初代の大尉によって付けられた名前であると言われていました。そして、前線から少し離れても大変に恐るべきものでしたけれども、実際に常に秘密でした。すっかり香気で満たされた小さな森の中で、私たちは一五五ミリ砲の重々しい砲台の二本の長い筒が現れるのを見ました。それから、その斜面の上には数々の素朴な大砲が退却していました。それらが嘗て砲弾を受けたと私は思いません。そこに私たちは秘密の電話線を一本流し込んだことが良く理解されます。私たちはその仕事を学びました。切断された電話線を結び直すために、戦火の中を走り回るのは非常に辛いものです。それは発砲のためにも正確に行くことです。他のものをそこへ送る別の方法も辛いものです。いずれにせよ、この仕事は困難な行いです。我々の戦線は稀に切断されました。そうなった時には、小康状態を待つ秘密裏に遠回りして何らかの電話線で事を行いました。兵隊が死を怖れないのは、自分の巧みさで死を避けるのを良く願っているからである、とスタンダールは何処かで言っています。それは私たちが行っていたこの種の戦争にも完全に当て嵌まりました。幸せな静けさと安易な仕事は、従

って嬉しさを二倍にしました。

大体八時頃に事は上手く行かなくなり始めました。最初の砲弾が飛ぶ音がしてゴンティエは、極めて真面目に言う処をかなり喜劇的な言い方をしました、「嫌だなあ!」。それは監視所用の或る避難所へ降りて行ったり、前線へ行こうとしたり、占領地を変えたりする時であり、一般的には銃剣をつけますが、それでは不十分です。その上に、私たちは十分話をして、実行に際しては細心でした。その理由は次のとおりです。その少し前の下士官であるデュジャルダンの頃には既に、隣接した電話機は一台一台が地面にアースされていて、その地面を通して通話は混線しました。如何にすれば良いのか、私はそのことを少しも自問しませんでした。受話器とマイクロフォンの小さな箱が炭素の粒で一杯で、その中で人が話していることしか私は電話機のことを知りませんでした。ところがランブクールから来た理工科学学校出身の将校は、電話機ばかりを調べていました。「アースの銃剣をお互いに五十メートル離して置くことがどうしても必要であるが、電話機が不足しているなあ。何をすべきだろうか」。私は考える時間を十分間をお願いしてから、彼に言いました、「単に、十分に穴を掘って金属製の金網を詰め込んで、唯一の良好な地面の傍に地面全体を集合させることです。地面による如何なる混線も無くなるでしょう」。眼を大きく開けていたデュジャルダンは、そのことを自分で繰返し言って実行しました。そして、理工科学学校出身者に嬉しそうに微笑しました。プロの職人なら全ての人々が良く知っていたやり方を私は見付けたのですが、私には全く知らなかったことです。しかしながら大戦前に、ゆっくりとですが流行している電気に関する事を良く考えていました。モンマルトルの〈民衆大学〉の時代にも、私は冬の間中、電流や磁石や発電機やモーターについての主要な実験を、取分け学生たちから成る聴講生たちを前にして繰返し行いました。只、一人の労働者が終わりまでいました。私には取分け自分自身が大変に土臭い理性の働きによって勉強になりました。しかし地面に関しては、本来の意味で問題は無かったのです。私は常に帰って来るための電話線を持っていました。当時の私の考えを繰返すなら、私が持っていた電話機は、配線とか水とか如何なる液体であろうと構わないで影響を及ぼすポンプの衝撃によるかの如く、様々なしるしを放っていると私は想像しました。それは常に叩かれた衝撃によって、もっと小さなしるしになりました。ところで、もしも私が戻って来る電話線を仮定したなら、私はこの周りの中を多少なりとも流体を走らせることが出来ました。その反対に両端があって孤立した電話線であったなら、私のポンプは、つまり私の電池は最早働きかけなくなりました。その時地面が意味していたこと、地面から戻って来たこととは何でしょうか。大したことではありませんが、戻って来る電話線は重要で、それで巨大な貯水池になり、そこでは欲しかった流体はどんなものでも手に入れることが出来るのです。そして欲しかった流体はどんなものでも押し返すことも出来るのであると私は自分に言いました。それなのに不完全なアースが表すものが伝えていることとは、割れ目があるとか偶然の管と結び付いた小さな貯水池です。隣接した貯水池の水位に変化が無ければ、汲むことも押し返すことも出来ない様なものです。そうでなかったなら、付近のあらゆる部署に地面を通して伝言も又送り届ける結果になりました。しかし、本当の地面を考えましょう。つまり際限が無くて、ポンプのあらゆる管理人たちに共通した貯水池のことです。その時の私のポンプの衝撃は、隣のポンプを乱すことが出来ないでしょう。この推論はすっきりときれいに理解させてはくれません。従って幾つもの発見が行われます。そして私がこの章を書くには、私がアルキメデスやガリレオのやり方で一度ならず推論したことを知って貰うために、知性の歴史のお世話にならなければならな

いのです。それは危険な外観に関して、少しは確かな判断力を説明してくれることになるでしょう。まずは純粋な政治的論争によって私は、全てを語ることに引きずり込まれていたことを理解しなければなりません。旧約時代の祭司たちは私を文学へ行かせますが、殆ど私を夢中にさせることはありません。しかし無名の友人たちには、私は何らかの説明をしなければなりません。もしも私が良識を持ち上げて勇気を起こさせるに至ったならば、私は自由のために多くのことを行ったに違いありません。

私が石器時代の方法に従って探求に向かいながら、読んだり学んだりしたことを紙に書いて持ち運ぶのを怠ったために、自分自身の考えを確立しても私は侮辱されるに違いありませんし、実際にそうになりました。少し後になって私は送信する任務のために、名前を決して知らなかった砲兵隊の中尉と一緒に何時間も付き合いながら、私は彼の主な部署を見ながら言います、「あなたは地面の一方所だけに、当然の様に付けていますね」。彼は答えます、「人々は至る所で、一方所だけに付けているが、それで成功している。決してその理由が分からないのだ」。彼は彼自身のために話し、私は私自身のために答えました、「理論はそこに導いている様に私には見えます」。私は理工科学校出身者を無視しました。私は直ぐに、彼が生き生きとした言葉で証言したので、軽蔑の観念を与えることを放棄します。「理論はここで何を見るべきでしょうか。そしてあなたは何を知っているのでしょうか」。私は元の地面に戻りました。勿論私は、最良の条件で平和の議論を再び始めるのを愛したことでしょう。私は何度それを願ったことでしょう。そして、私は独りではありません。少なくとも、これらには復讐することは決してありません。そして既に少なくとも罵倒が脇で変わることはあり得ます。権力は主人と奴隷を腐敗させます。しかしながら奴隷の方が、腐敗は僅かに少ないのです。

この年の夏は話すことがありませんでした。私たちは暴君から逃れていましたし、暴君が居なければならぬ時は避難しました。軍艦の有名な大砲しかありませんでしたが、それは敵に影響を及ぼすよりも、危うく私たちに多くの損害を与えそうになりました。ポーモンの稜線からは、その地方の大きな広がりが見えたと私は言いました。底には広い盆地が広がり、オ・ド・ムーズの地平線に囲まれていて、ヴィヌールの村が大変良く見えました。そして、ドイツ軍の駅では何台もの機関車が運転されていて、部隊の人々や弾薬を降ろしていました。我が軍の最良の大砲であれば十六キロメートルの射程距離は十分可能でした。ポーモンとフリレイの間にある素晴らしい避難所を造った水兵の射手たちがやって来ました。そこで私が見たのは口径が一三〇ミリかそれに近い優美な大砲で、軍艦の砲塔に似ていて最終防衛陣地の中で、目盛付きの軸の上を回転していました。私たちは大きな希望を持ちました。実際に砲弾は恐らく標的へ行きましたが、殆どが少しも爆発しなかった様で、私たちには何ものでもありませんでした。そしてヴィヌールの駅での運行は何時もの様に続きました。しかしながら、私たちは報復の発砲を受けました。それは二一〇ミリの大きな砲弾であったことを私は初回から知らされました。私たちが詰め込まれていた地下室のドアから、私は食事用のテーブルの如く土の塊が^{うずたか}堆なくなっているのを見ました。負傷者が出血して呻いていました。海軍の将校が電話交換手の水兵と一緒にそこにおりました。そして私は、命じられた命令が大変に良かったことを思い出しております。「行こう、出るんだ。前線を立て直しに行け」。水兵は決して行きませんでしたし、将校も同じでした。私には自然に見えました。その上、私たちも全員が恐怖に震えて愚鈍になっていました。そして弾着観測将校が地下室にいた時、電話が何に役立つのか私には分かりませんでした。ゴンティエ

はその日、馬たちと一緒にミノルヴィルにいましたし、これらの結果を観察していました。彼は、私たちが全員死んだと思っていた。

それとは対照的に、私は最良の素晴らしい夜会のこととも思い出します。G見習士官とゴンティエと私は、一度ならず何度も敵の戦線の村々が砲撃されることを知りました。反撃が必要とされている処でした。ところが私たちはあらゆる任務から自由になっていましたので、歩兵隊と砲兵隊の中間の場所にあるリシュモンへ降りて行きました。見渡す限りに蝦夷菊が大地を覆っていました。道は、草が生い茂っていて殆ど見えませんでした。有刺鉄線を過ぎて私たちは、トゥールとかシャトルーと同様に、平静な六月の空の下に横たわり、未開人に戻った様になって大きな谷間に居りました。数々の砲弾は私たちの上空を二方向へ過ぎて行きました。それは私たちには月や星々と同様に自然である様に思いました。ボーモンは火山の様に煙を出して照らされていました。一時間後に、私たちはこの恐ろしい場所で眠りに就こうとしましたが、そこは少なくとも些かもっと大地に近い廃墟になっていました。村の最期は間違いから起こるのです。まさに偶発事以外は怖れてはならない時でしたし、取分け夜がそうでした。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにはられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲 (たかむら まさのり)

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部(仏文専攻)卒業。詩集は『螺旋』(一九七七年)、『六つの文字』(二〇〇四年)、『七〇年代の雨』(二〇一〇年)。評論集『現代詩再考』(A&E・二〇〇四年)。翻訳は『アランの「エチュード」』(創新社・一九八四年)、アラン『初期プロボ集』(土曜美術社出版販売・二〇〇五年)、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』(文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年)。共同編纂『齋藤志詩全集』(土曜美術社出版販売・二〇〇七年)。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞(評論部門)。二〇一二年から電子書籍(パブー)に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹 (ながお まさき)

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』(共著)

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』(韓国・呉世榮)他

原 詩夏至 (はらしげし)

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』(共著)、句集『マルガリータ』『火の蛇』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞)、歌集『レトロポリス』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞)『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

堀口 精一郎 (ほりぐち せいいちろう)

一九二七年三月、東京生まれ。青春前期は皇国少年として熱血の血をたぎらせた、いわば戦中派のはしぐれ。戦後は文芸特に短歌に親しむ。

一九八九年仲間と共に詩誌「さやえんどう」創刊、詩を書き始める。詩集『マンモスの轍』(土曜美術社出版販売・一九九四年五月)、『神の魚』(横浜詩人会・二〇〇〇年十月)などを刊行。二〇一四年七月、二五年間編集発行人を続けてきた詩誌「さやえんどう」を終刊。同じく二五年間実績を残してきた月二回の研究会も解散。身軽になった。現在は、日本詩人クラブ、横浜詩人会、風狂の会に所属するのみ。今後は楽しく生きてゆきたいと思っている。なお未刊の詩篇が多数残っているので最後の詩集を出したい。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風 狂 (ふうきょう) 第44号

2018年3月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/120636>

編 集 : 風狂の会 (担 当 : 高村 昌憲)

編集担当者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/120636>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト